明石の史跡（１７）明石藩・槍の又兵衛

寛永１１年（１６３４）、宮本武蔵（５１歳）は豊前小倉藩主小笠原忠真の客分になっている。翌年以降の元旦に、藩主の面前において、宝蔵院流槍術の名手として知られた、高田又兵衛吉次（４５歳頃）と立ち会っている。武蔵は木刀（一刀と考えられる）を持ち、又兵衛は鉤のついた稽古槍と伝えられる（宝蔵院流の槍のサイズは2.7～3.0m。12～15ｃｍほどの横刃がついており、十文字鎌と称した＝国史大辞典１２）。

仕合の経過は、三度程の手合わせの後は、一進一退が繰り広げられ、やがて又兵衛が槍を投げ出しての敗北宣言をする。事態の推移を計りかねた藩主に、木刀より長い槍は七分の利があるはずなのに、勝を得られなかったのは、自身の負けである、と説明した（久保三千雄著『宮本武蔵とは何者だったのか』）。いわゆる位詰（くらいづめ＝食詰）である。優位な体制をととのえ徐々に詰寄せる意味で（広辞苑）、武蔵の強さを証明する話であろう。

天正１８年（１５９０）、伊賀国伊賀郡白樫村（三重県上野市）に生まれた又兵衛は、若くして奈良の宝蔵院胤栄の高弟中村尚政に師事。大坂夏の陣では、父吉春に従い籠城したにもかかわらず、父は落城した５月７日に戦死。同じ日、又兵衛は、小笠原秀政に従軍して手柄をあげる（慶元記）。

元和３年（１６１７）７月、小笠原忠政の明石入部以降に、招かれて２００石の知行取りとなる。上記の事柄からは、又兵衛の大坂入城は、情報収集の意図が推察される。寛永９年（１６３２）の小倉移封に随い、島原の乱には、武蔵とともに参陣。慶安４年（１６５１）４月１１日には、将軍家光に槍術を披瀝している。寛文５年（１６６５）の隠居時には、７００石の鉄砲物頭であった（国史大辞典９）。

日本歴史学会会員 茨木 一成